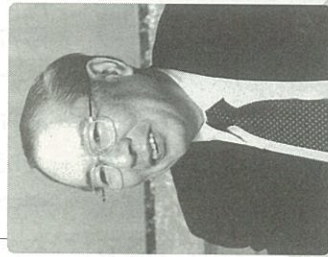


著名的無名人 を訪ねて

text by
Nagano Yoshinobu

連載 第一 203 回

日本再生に「氣」と「技」を賭ける達人たち(その3)



永野 芳宣

ながの よしのぶ

1937年生まれ、東京電力㈱理事企画部長、常任監査役、特別顧問、政策科学研究所所長、副理事長、九州電力㈱チーフアドバイザーを経て、現在、チーフ特別顧問(特正)東電機機製作所経営顧問、立山科学センター顧問、九州電力㈱顧問、シド㈱顧問、工研院理事、局長など。
『外伝に抗した男』(角川書店)、『小説古河市兵衛』(中央公論新社)、『日本型多トピア経営』(ダイヤモンド社)、『明徳経営』(中央公論新社)、『日本の著名的無名人』(1)、『1』(伊豆研究社)、『物語』(イデア)、『1』(中央公論新社)、『株式会社が日本を変える』(産経新聞出版)、『高野聖の心』(伊豆研究社)、『目指せ日本だ』(3)、『(空)にゆけず』(同上)、『クリエーター』(同上)、『国家の戦略的構想』(同上)、『著者』、『脱原発は日本国家の存続』(同上)、『送電分離は日本国家の破産』(同上)、『著者』、『著者』

火山で出来た大隅半島

アベノミクスが注目を浴びる以前から、何としても過疎的狀態の地域・地方を甦らせなければならぬ、鹿児島の大隅半島を「発展させよう」と頑張っているのが、農業生産法人株式会社さかうえの青年社長 坂上隆である。彼の努力が生半可ではないと思うのは、農業という事業はその土地柄、特に「土(つち)」の性質と関係が深い、というより

《つち》が良いかどうにかかっているときさえ言えるからだ。ミネラルたっぷりの水を配し、太陽の恵みを受けて酸素と窒素などの成分が程よく調和しているようなところ、それがわれわれ日本人に欠かせないコメ・麦・野菜・果実を、豊富に提供してくれる「土(つち)」を持った農地である。例えば隣の県、熊本のカルデラ地帯は、正に典型的な農地であろう。

しかし、坂上隆が農業に取り組んでいる大隅半島の土地は、そんな優れた「つち」を持ってはいない。大隅半島の「つち」は、生来《桜島》の火山灰で出来上がったものだからだ。しかも、桜島はいつ大噴火があるかも分からない活火山である。そこで若干長くなるが、具体的にこの地域の歴史を簡単に見てみることにしよう。気象庁等の資料によると、別名錦江湾と呼ばれている鹿児島

湾で、約2万9千年前に巨大な噴火が起きた。その時陥没してできたカルデラに、海水が流れ込み大きな湾のくぼみが出来上がった。そのくぼみの中でさらに噴火が繰り返され、2万6千年前に「桜島(当時は北岳)」が誕生する。それ以来継続してきたその噴火は、約5千年前に一端停止したといわれる。ところが、その5百年後すなわち今から4千500年前(縄文時代中期)から、再び噴火が

始まり、最初に来た北岳に覆いかぶさるようにして南岳が徐々に隆起し、現在の桜島になったといわれている。さて問題は、有史に残る「大地を揺るがす大噴火」が、どのように繰り返されてきたかである。一番古い噴火は7日間続き62戸が埋没した西暦764年の「天平噴火」、次いでその約7百年後の1471年の「文明噴火」、3番目が、死者140人そして農作物を20年間の間、降灰で作ることが出来なかった1779年の「安永噴火」、4番目が約100年前1914年(大正3)1月12日に発生した「大正噴火」である。その時の模様は、記録として概ね次のように残されている。

「1月12日、東と西の両山腹から爆発が起こり、その噴煙は上空8千呎にも達した。流出した30億トンの溶岩流により、大隅半島と陸続きになった。約8時間後には錦江湾内に大地震が発生した。翌13日の未明に掛け、黒煙・火山雷・空振が顕著。溶岩流で島の3部落埋没。噴火の強震で、鹿児島市内にも被害が及ぶ。全壊埋没戸数120棟、死者58名、負傷者112名、農作物被害甚大」

その後今日まで、爆発・噴火を併せて昭和期に59回、平成に入ってから21回に及んでいるが、ほとんどは火山爆発を伴っており、農作物への被害も常時発生している。特に、1975年(昭和50)頃から昭和が終わる1

988年(昭和63)まで、13年間に亘つての爆発は、毎回大噴火に均しいものであった。1986年(昭和61)には、噴石が航空機に当たりガラスが割れる被害が生じている。平成になってからは、毎年爆発はあるものの比較的平穏であったが、ごく最近2008年(平成20)頃から、また火山活動が激しくなっている。

「さかうえ」の農業の成功が齎すもの

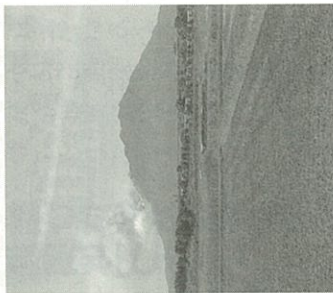
特に、風向きから最も被害が大きいのが大隅半島である。もちろん、ここで取り上げている志布志地域の1帯は、100年前の「大正大噴火」で火山灰に蔽い尽くされた。作物は全て枯れてしまい、飲料水もなくなった。よって、人間が生きることさえ難しくなったという。この話は、坂上の祖父の時代である。おそらく、彼の父親もまだ生まれていなかったらうが、坂上は父親から100年前の桜島大噴火の話はとつくりと語り聞かされてきている。

鹿児島の中でも特に大隅半島、その中でも志布志は、特産品としてお茶や半半などは紹介されているが、農業という言葉はあまり聞かない。それは、農業を業とすることが大変難しく、産業の誘致もなかなか出来ずに、要するに日本の中でも、後進地域となつてしまったことを意味している。

戦時中は、鹿屋の海軍基地など軍事施設の利用等のため鉄道が敷かれ、宮崎県の日南や串間と繋がりが、やや潤った時期もあった。だが、戦後はその期待も絶たれる。東西冷戦が続く中で、日本に対する欧米陣営の期待は大きく、1964年(昭和39)の東京オリンピックを境に、わが国は本格的な高度成長期に入った。鹿児島でも、さまざまな巨大開発プロジェクトがひしめいた。新鹿児島空港、九州縦貫自動車道、鹿児島新港、鹿児島臨海工業地帯などの建設推進。特に、リーマンショック以前に纏められた、政府の港湾・山村・離島の振興策では、この地域は南九



志布志の特産物「ピーマン」



噴煙が上がる現在の桜島